

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二一五三・〇七〇七
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両方で健全な国体を支える国家」を求めます。

『揺れる情(こころ)』通信⑪

土屋宜之

京都医療センター緩和ケア創設者・稲荷山武田病院院長
以前、行方不明になった子供さんを探し出したボランティアの爺爺さんがいました。この爺爺さんは、その子供の感情(うごくこころ)を感じ取ったのではないのでしょうか。この爺爺さんの心映えも「もののあはれ」に間違いありません。私は平成7年の阪神淡路大震災の時、芦屋の精道小学校の救護所に京都医療センターの薬剤を持って急行しました。この時、被災された人々の感情(うごくこころ)の存続を確かに感じることができました。そして共有できたのです。今でも特異な体験として鮮烈に情(こころ)に残っています。この感動も「もののあはれ」そのもののなのです。

情(こころ)は感く(うごく)ことによつて存続しているのです。

京都国立近代美術館

5月30日～8月25日

《印刷／版画／グラフィックデザインの断層》

マス・コミュニケーション時代が到来した戦後の日本では、印刷技術の飛躍的な発展とともに美術と大衆文化の結びつきが一層強まり、とりわけ版画とグラフィックデザインの関係性が議論の対象となりました。

本展では、1957年から1979年まで全十一回にわたって開催され当時の気鋭の版画家やデザイナーの活躍の場となった「東京国際版画ビエンナーレ展」に焦点をあて、国立美術館のコレクションから同展の出品作家を中心に紹介します。

同時代の多様な視覚表現のなかに交錯した版画とグラフィックデザインの様相を通して、印刷技術がもたらした可能性とその今日的意義を改めて検証します。

《時代の認識》

常楽臺住職 今小路覚真

五十年ほど前に海外に渡り、その地で伴侶に恵まれ、望み通りの生活を送っている日本人女性と出会いました。

彼女のわたしへの第一声は「わたしの時代は写真を交換したり、親の云う人とお見合いをするしか結婚は考えられなかった。わたしはたまたまい出会いが外国であったから、いまの自分があるのです」でした。

彼女とわたしとは誕生は同年でした。

わたし自身の五十年前を振り返ってみました。わたしの周りの同年の男女は、青春を謳歌していました。

結婚で親の云いなり、などといったことは敗戦以前の話として、知識として知ってはいいましたが、実際に見聞きすることはありませんでした。

五十年前に海外に渡ったこの女性が、どうした環境で青春を過ごしておられたのか、聞いておけばよかったと今になって悔んでいます。

《オリヴオイル》

イタシヨク 福村直

イタリア料理と深い関係を持つオリヴオイル。原産地とされているのはトルコ南部の地中海に面した地域で、ヨーロッパではワインと同じく高価で貴重、また聖なる物として扱われてきました。今でも生産量の90%以上が地中海沿岸地域に集中しており、イタリアが最も多く生産しています。他の植物性オイルの多くが種子を砕く作業が必要ですが、オリヴオイルは柔らかな果実を搾り精油するため、労力が少なく人類が初めて手に入れたオイルとなりました。その素朴な製法は何千年もの間ほとんど変わっていません。また品種、地域により風味に差が生まれ易いのもこのオイルの特徴でしょう。こうして炒め物に使うだけでなく、バジルを使った緑色のジェノベーゼソース、イワシをはじめ保存を目的としたオイル漬けなど工夫を凝らした料理が地域ごとに生み出されました。また近年は健康面でも注目されており、オイルに含まれるオレイン酸は悪玉コレステロールを減少させるため、動脈硬化や生活習慣病の予防に作用します。

健康レシピ

栄養士 國松美也子

《五月 美肌メニュー 桜えびと長葱のグラタン》
初めまして。今月からよろしくお願いします。

材料 (ココット6個分)

山芋 1.3本 白葱 1本 桜えび(乾燥) 5g とろけるチーズ 30g 豆乳 100cc

1 山芋はすりおろしておく

2 白ネギは斜めに5ミリ幅にスライス

3 フライパンで桜えびを軽く乾煎りし、そこに白ネギと豆乳を加え白ネギがしんなりしたら、山芋を加え塩コショウで味付けし、全体がなじむまでよく混ぜる。

4 ココットに分けて、上にとろけるチーズをのせてトースターで5分ほどチーズがこんがりするまで焼く。

《大原流声明雑話⑪》

實光院住職 天納玄雄

天台声明には実に様々な曲調がある。西洋音楽の長調・短調のような違いとして、呂曲・律曲・中曲の三種類がある。これを修得することは声明家としての第一歩であり、とても重要視された。それは大原寺の境内を流れる二筋の川に呂川・律川と名づけていることから窺える。かつて音痴な僧は「お前は呂律の回らんやつだ」と揶揄されたそう。現在の意味は変化してしまっただが、もとは声明用語から生まれた慣用語である。

現代においては音律的正しさと同時に、法筵の衆僧の声がキレイに揃うことも重視される。私も初めて声明を習ったときも「耳で唱えなさい」と指導された。自分の音が正しいと頑迷に主張するのではなく、皆が協調して調和すべし、という意味である。